

人間ドック

2023. 1. 31

今年度は、人間ドックの年だった。今までならば、この日を目標に減量に励むのだが、今回は調整に失敗した。その結果、階級を上げてしまった。いつも思うのだが、健診センターのスタッフの皆さんは優しい。そして、慣れており、次から次へとミスなく業務をこなしていく。実に見事である。感心するばかりである。

我々、健診者は、決められた服装に着替えるだけで、何だか具合がわるそうに見えてくるから不思議である。名前を呼ばれると、声のするほうに向かう。こんなに健診者がいて、間違ったりしないのか。自分の番が抜かされて、名前が呼ばれないことはないのか。いらぬことを考えてしまう。だが、ミスは起こらない。

それぞれの検査に行くと、同じ説明を何人にもするのだろう。大変だなあと思う。何だか申し訳ない気分になってくる。途中から説明が雑になっているとは思えない。きちんと一人一人に対応してくれている。

バリウムを飲む検査がある。横を向いたり、体をまわしたり、逆さになったりと、毎回ハードである。逆さになるときは、必死である。他の人も耐えているのかなと思ってしまう。たまに、厳しめの担当者にあたることもあるが、今回は優しい方で助かった。

人間ドックに行くと、必ず出会いがある。知り合いと一緒にいる。今回はというと、もう一人の方と一緒に胃の検査に移動し、廊下のいすに腰をおろしたタイミングだった。「高澤先生ですか。中学校のときに、〇〇先生のクラスで、高澤先生に国語を習った〇〇です」「ええそうなの。すぐにわかった?」「名前が呼ばれるのを聞いて」そうなのである。けっこう大きな声で、自分の名前が何度も呼ばれる。それが人間ドックである。聞けば、中学校の教員になっているそうである。話しているうちに、スイッチが入り、一気に記憶が蘇る。これも人間ドックの楽しみの一つである。

問題は結果である。毎回わるくなっていく。加齢もあるが、一番は運動不足である。数年前から動かなくなった。運動する機会がなくなった。ちょっとやそっと歩いたからと言って、さほどの効果はないことは、過去の経験からわかっている。さて、どうするか。

いただいた人間ドックの案内を読み、コロナ禍のため食事の提供がないことは理解していた。帰りに、どこで昼食をとるかと考えていたのだが、結果のわるさに、食欲もどこかにいってしまった。すべてが終了するタイミングで、袋を渡された。「軽食を用意しました」とのこと、中には調理パンが2つとあんパンが1つ入っていた。予期していなかったためか、落ち込んでいたためか、うれしかった。心にしみた。コンビニのコーヒーとともに、おいしくいただいた。

コロナ禍になり、今まで以上に病院に勤務する方は大変だろうと思う。それでも笑顔を絶やさず、一人一人にきちんと対応してくれる。ありがたい。そんなことを考えながら、学校に戻った。勤務を終え、家に帰った。そして考えた。「よし、階級を落とすぞ」そう心に誓った。